生徒会四天王のあの娘を性奴隷に調教！
「らめっ！これ以上はダメ！認める！負けを認めるからぁ！」
敗北の代償

一つ星相手に
まさかの敗北を喫して
しまった乃音・・・

ぐぐ・・・

はぁ!

はぁ!

ははは!
やったー!やったぞー!

思った通り
纏流子との戦いの傷が
癒えてなかったようだな!

これで俺様も
ミツ星に昇格だっ!

ブーン

ドン!!

ハァハァ

くぅぅ…あんた…
あまり調子に
乗るんじゃないわよ

あんた程度体力が
回復したら一発で
殺してやるんだからね!

おー、
怖い怖い
w

ニヤァ

その減らず口
今すぐ黙らせてやるぜ

「あぎっ！ぎぃっ！
ぬっ、抜きなさいよぉぉ…はぎぃっ！」

「おらおらおら！
乃音ちゃんの処女ま○こ百裂突きぃぃ！」

「んぎぃぃぃっ！や、やめっ…あうぅぅっ！
いあっ！あぎっ！んうぅぅぅぅっ…！」

（んあぁぁぁぁぁっ！痛いっ！痛いぃぃ！
な、何なのこれっ!?戦ってる時でもこんなに
強い痛み感じた事ないっ！初めてがこんなに
痛いなんて聞いてないわよぉっ！）

「うぁぁぁっ…！ふ、ふざけんじゃないわよぉ…！
この程度の痛み…全然なんともないんだからぁ…はぎっ！」

ズニュ！

ズニュ！

ズニュ！

ズニュ！

「うまいーうまいーんまままー
ちくしょう、なにこれ、
まのにうまいんじゃないのか…」
「ふっーふっーふっ、味つけまたまー
ーもちろんて王子にのみ出来ー」
「な、母ってー…ーふ、ふざけないでー
まんた奴隷が私に母王ったんて
言ってもいいもんー」
「このもちろー極楽の料理ーメス
ンてい豊かいやがれHHー」
ーベベベベベベベベベベベベベベベベー
「うまままままままままままままー
ちっちまー味わってどれたっちっっっー」
ミルミルミルー
ミルミルミルー
ミルミルミルー

「はぁっ…はっ…はひっ…ひっ…！」

「けけ、四天王ま○こにたっぷり注いでやったぜw どうだ乃音ちゃん？いい加減負けを認める気になったか？」

「バ、バカ言わないでっ…！この程度のことで私が負けを認めるわけないでしょ……！」

「くくく、強がりだけは一人前だな。それじゃぁ四天王様がどこまで耐えられるか一つ我慢比べでもしてみますかw」

ドクドク

ハーハー

ハーハー

（負けないっ！四天王の名にかけて絶対こんなクズなんかに負けないんだからぁっ……！）

・・・三時間後・・・

ジュブッ！ビュー！ジュボジョブジョボ！

「おらおらおら！
まだまだ注ぎまくってやるぜ！」

「ひゃぎいいいっ！んはぁっ！
ひゃ！ひゃめでぇぇっ！ひぎいいいっ！」

（な、なんなのこいつ!? 一体いつまでやるのよっ!?
も、もう無理っ！これ以上犯されたらあそこが
私本当に壊れちゃうっ！そ、そんなのやだっ！）

「ら、らめっ…！これ以上はらめっ！
み、認めるっ！負けを認めるからぁ……！」

ビュル！

ビュル！

ビュル！

ビクン！

ズコ！ズコ！

「あひいい…へひいい…はへええ……」

（はひっ…はひっ…はひっ…
や、やっと終わった……こ、これ以上されたら
わ、私ほんとに死んでじゃってた……）

「んー？よく聞こえなかったなぁ？
申し訳ありませんがもう一回
言って下さいませんかねぇ乃音様w」

「うぅ…み、認める……
負けを認めるって言ったのよぉ……」

「んー、負けを認めてる割に
随分と尊大な態度だなぁw
しょうがない、ちゃんとした謝罪が
どういうものか教えてやるかw」

ブルブル

ソフ

ソフソフ

ハピィハピィ

「はぁ、はぁ…
こ、これでいいんでしょ……？」
ズル
（くぅ、最低…！
何でこの私がこんな卑怯者のクズ野郎に
ひれ伏さなきゃならないのよ……！）
「おら、ぐずぐずしてんじゃねえよ。
それとも教えた言葉をもう
忘れちまったとでも言うのか？」
「う、うるさいわね！
ちゃんと覚えてるわよ！
くぅ、こうなったらもう自棄よ！」
ズル
ズル

「わ、私ごとき下等生物が三ツ星を名乗ってまことに申し訳ございませんでした……っ、も、もう二度とあなた様には逆らいません…今後は…ぜ、絶対服従を…約束致します……」

「ひゃはは！最高だぜ！あの四天王が俺に頭を垂れて屈服してやがる！いいねぇ！この姿バッチリ画像に収めてやるぜ！おい乃音、動くんじゃねえぞ！」

パシっ！パシャパシャ！

（うううう！悔しい！悔しい！悔しい！こんな屈辱生まれて初めてよ！こいつ絶対に許さないんだからぁ！）

「けけけ、今俺様には絶対服従と言ったな？」

「……はい……」

（はっ、バカじゃないの？あんたが無理やり言わせたんじゃないのよ！）

「いいか乃音、お前は今から俺様の性奴隷だ、今後は俺様の事を敬意をこめてご主人様と呼べ。わかったな？」

「……はい……ご主人様……」

「よしよし、素直な奴隷にはご褒美をやろう。おい、動くんじゃねえぞ」

ぐぐ！

ビュー!

シュッ!シュコ!シュコシュコシュコ!

(くぅ、何て汚らしい音……女の子の目の前でマスをかくなんてこいつ本当にバカなんじゃないの?)

「ふっ、ふっ、くぅ…イクぅう!」

ビュッ!ビュブブッ!ビュブッ!

「ふっ、ふっ、動くなよぉ…今すぐその可愛い顔に俺様のザーメンぶっかけてやるからなぁ♡」

「はぁ…はぁ…う、生臭い……」

ハァ

「まあまあだな。おい乃音、分かってるとは思うがもしこのことを誰かにバラしたらこの画像世界中に流してやるからな」

「わ、分かってるわよ……」

（今は耐えるのよ…体力が回復したら画像を取り返して絶対にぶっ殺してやるんだから…だからそれまでは耐え続けないと……！）

ハァ

「おら、ご主人様の精液をかけてもらったんだ。感謝の言葉はどうした？」

「ご、ご主人様の…貴重な精液…ありがとうございました……」

ハァ

「は…はちゅ…ちゅ、ちゅぶぶっ…ちゅるるっ…」

「おほぉ、気持ちいいぜぇ♡
さすが四天王様、初めてなのに
ち○ぽの扱いもすぐに上達したな。
ほら、もっと下のほうも丁寧にやりな」

ちゅぷ

ちゅぷ

ちゅぷ

ちゅぷ

「ん…わ、分かったわよ……はちゅ…」

（ん、しょっぱい……こいつ我慢汁流しすぎよ、
イくんならさっさとイきなさいよね…っ！）

「よし、それはもういいぞ。
次はち〇ぽを口いっぱいにくわえな w」

「く、くわえる……っ!?
そこ、こんな汚いものなめるだけでも嫌なのに
その上口の中に入れろってんの!?」

「奴隷なんだからそのくらい当然だろ？
それともなにか？お前の恥ずかしい画像を
世界中に流しちまっていいのか？」

「くっ、
わ、分かったわよ……」

（こいつ、人が大人しくしてればつけ上げって……
画像を隠した場所さえ分かれば
こんなやつのいいなりになんてならないのにっ！）

「おら、どうしたんだよ。さっさとしゃぶれよなw」
（ふぅ、ふぅ、なによチ○ポくらい…こんなのくわえる事くらいなんでもないんだから……！）
ジュポ
ジュポ
「ん……んちゅうううう……」
ジュポ
（うえぇぇぇ！何よこの味い…！おしっこと汗が混ざって蒸れた味……く、臭すぎるぅ…なめるのとくわえるのじゃ全然違うぅ……！）
「うほぉ、気持ちいいぜぇ♡ほら、早く動けよなw」

「んっ！じゅぶっ！じゅぷっ！はふっ！
ふう…！んうううっ……！」
びくん
（うっ…！な、何っ!?
こいつの急に口の中で大きくなってきた…！）
びくん
ビュル！
「へへ、もう限界だ…おらっ、イクぜ！
ちゃんと全部飲み干せよっ！」
ビュルルルルッ！
「んぶうううううううっ!?」

「うげぇっ！げほっ！げっ！おげぇぇぇ！」
「おいおいこぼすなよ、俺は全部飲み干せって言ったはずだぜ？」
「ば、バカ言うんじゃないわよ…！こんなのまずいの…咽喉に絡みついて飲み切れるわけないじゃないのよ……！」
「はぁ？なんだその態度は？画像をばらまいたっていいんだぜ？」
「くぅ……も、もうしわけございませんでした……」
ゼェ
ゼェ
ゼェ
トロ

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……」
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
「へへへ、まだ触ってもいないのにお〇んこびしょびしょになってるぜw」
「ば、バカ言わないでよ！そんなことあるわけないでしょ!?」
「そろそろ正直になれよ。本当は俺様のち〇ぽの味が忘れられなくなっちまったんだろ？w」
（何なのよこいつぅ…！私が恥ずかしくなることねちねち喋って…ち〇ぽが忘れられないなんて…そんな馬鹿な事ある……は…ず……）

「おらぁっ！」

びくん

びくん

ズブブブブブッ！

「はうううううううっ！」

ズボッ！

びくん

（んうぅぅ！またセックスさせちゃったぁ…
うぁ…で、でもこれこの前のと違う…
あんまり痛くなくて…かわりにお腹の奥が
あったかくなるような…な、何よこれぇ…）

「へへ、相変わらず最高の感触だぜ…
それじゃ動くぞ……♡」

「ひんっ！ひぎっ！ひぐっ！はひぃんっ！
ちょ、ちょっと…激しすぎ…んはぁぁっ！」

ズボッ！

ジュブ！ブチュ！ジュ！じゅぶぶ！

「へへ、あの四天王が俺様のち〇ぽで
あんあん喘あえいでやがるw
これは世界一の見世物だぜw」

「ふ、ふざけんじゃないわよ…っ！
あ、あんたなんかのち〇ぽで…んひっ！
か…感じるわけ…ないでしょ……ひゃひぃん！」

ビク
ビク

ズボッ！

ズボッ！ズボッ！

（う、嘘よ、こんな…無理やり犯されて
感じちゃってるなんて…わ、私は
四天王よ…？そんなことあるわけないぃ…！）

「ひゃひっ！あひぃんっ！はひぃんっ！」

びく！
びく！

「ぐっ…そろそろイキそうだぜっ！」

「や、やだ！やめてっ！
今日は本当に危ない日なのっ！
お願い！外にっ！外にだしてぇっ！」

「へへっ！
そう聞いちゃなおさら止まらねえぜ！
おらっ！俺の子供を孕ませてやる！」

ビュブッ！ビュぶるるるるっ！

ビュッ！

「ひぁぁ！
いぃ、いやぁぁぁぁぁっ！」

「んあ…はぁ…はぁ…うぁぁぁ……」
ハー
「へへへ、どうだ乃音ちゃん、濃厚ザーメンを子宮にばっちり注ぎ込まれた気分はよぉ？」
「さ、最悪に決まってるでしょぉ…中には出さないでって言ったじゃないのよぉ……」
「性奴隷の言うことなんか聞くわけないだろw これだけ注げば妊娠も確実なんじゃねえか？ いやー優秀な遺伝子を残せてよかったぜw」
「うぅ……もういやぁ……」
ドプッ
ハー
ハー

「んっ…んう……ふっ…ふう……」

ハァ
ハァ

「な、何考えてんのよこの変態……っ、こんなバカバカしいことばっかり…んっ…よくもまあ考えつくものだわね……っ」

「へへ、なかなか面白い見世物だぜ。なんてったって天下の乃音様が縄一つでこうやって翻弄されている姿を堪能できるんだからなw」

「あ…んう…さ…最低……んうう……」

ビク

「ほら、ちんたらしてないで早く動けよ遅いと俺様が直々に引っ張るからなw」

ズズズ…

「はぁ…はぁ…んふっ…ふっ…はふっ…はぁっ……！」

「おらどうした？
歩くペースがどんどん鈍ってるぞw」

ハー
ハー

「んっ…んひっ…ひっ…んうぅ……」

（そ、そんなこと言われても…これ…
歩くたびにクOトリスに当たって……んんっ…
もう立ってるのだってキツい……はうっ、
こ、これ…思ってたよりやばいかも……っ）

「おいおい、全然進まなくなっちまったじゃねえか。
しょうがない、俺が手伝ってやるとするかw」

ぐぐっ

ズズ！
ズズ！

「おらおらおら！さっさと歩け！」

ドン

「ほらどうした!?
少しは四天王のプライド見せてみろよ！」

ドン

「ズグウウウッ！

「んひいいいいいいっ!?」

ジュボッ！

ジュボッ！

「はっ！はひっ！はへっ！んひいっ！
あ、歩くっ！歩くからやめてっ！
縄でお〇んこ擦らないでぇ！んひいいいっ！」

「ひっ！ひぎっ！んぁぁ…はううっん！
やっ！う、動けな……んひいいいいんっ！」

びくん！

「ほれほれ、自分で動くって言ったんだろ？
ならちゃんと歩いて見せろよw」

びくん！

（だ、ダメっ！もう一歩も動けない…っ！
や、やだっ！このままじゃ私イッちゃ…
イッちゃうよぉぉ…んぁ…あぁぁぁ……っ）

「ひぁぁぁぁぁぁぁぁんっ♡」

ビュビューッ！

シャアア！

「はひぃ…えひぃ…いひぃぃ……♡」

ハヒィ
ハヒィ

「ひっ…ふひっ…う、うるしゃいぃ……」

（イッた…わ、私……縄なんかでイッちゃった……
お、女の子ってのは敏感なとこをいじられると
縄にすら勝てなくなっちゃうの……？）

「へへ、派手な潮吹きだったな。
そんなに縄が気持ち良かったのか？」

「だが倒れなかったところだけは褒めてやるぜ。
やはり俺が思った通りお前は最高の玩具だぜw」

ドサッ

「へへ、きれいな色だろ？」
（はぁ、はぁ…パチパチしてる…ろ、蝋燭プレイなんてこいつ頭がどうかしてるわよ…！）
「SM用の蝋燭だから火傷なんかはしないぜ。お前は安心してひいひい叫んでればいいんだよw」
パチ
パチ
「う、うるさいわね！余計なことしなくていいわよ！」
（な、何よこんなの、たかが蝋燭の火じゃない…こんなのその気になれば少しも熱くなんて感じないんだから……！）
ビキッ

「おっ、そろそろだ、垂れるぞ垂れるぞw」
ジュウウウウッ！
「んあああああああああっ！」
ボタ
「あああああっ！
熱いっ！熱い熱い熱いいいい！」
ジュー！
「へへ、随分と大げさな反応だな。
おっ、蝋燭を間違えちまったぜ、
悪い悪いw」
ビク
ビク

「へへ、悪いな。
間違えて垂れてからもしばらく熱さを維持する
特別性の蝋燭を使っちまったぜ、
いやぁうっかりしてたぜw」

「なっ、何が間違えたよ…っ！
バカにするのもほどほどに
しなさいよっ……！」

「まあいいじゃねえか、
どうせ四天王様はこの程度の
熱さなんて平気なんだろ？」

「あ、当たり前じゃないのよ…！」

「それならいいじゃねえか、
休んでないで続けようぜw」

はっ

はっ

はっ

はっ

フル

フル

「あっ！熱っ！んっ！んあっ！
んううっ！だ、だめっ！やっ！ひぃんっ！」
「あれぇ、
なんかエッチな声が聞こえるなぁ？
まさか乃音ちゃん熱い蝋を垂らされて
気持ちよくなっちゃってるのかなぁ？w」
ポタ
「ち、ちがっ！
こんなの熱いだけ…んああっ！」
（や、やだっ！なんでこんなのが
気持ちいいのっ!?
こんなの熱いだけなのに…！
んううっ！だめっ！熱すぎて
何も考えられなくなるぅ！）
「あっ！あひっ！い、いやっ！
もっ、やだっ！お願いっ！
やめてええ……っ！」
ビク！
ビク！
ジュ！
ジュ
ポタ

「ひゃ…ひゃへ…ひぎっ…ひいいいい……」
(あっ、あひっ…感じちゃってた…私…蝋燭で責められて……気持ちよくなっちゃってた……)
「可愛いぜ乃音、いつもの服もいいがやっぱりお前はこういう淫乱な恰好が似合うなw」
パチ パチ
(だ、ダメ…体がまともに動かない…頭の中がエッチなことでいっぱいになっちゃってる……こ、これ以上されたら私ほんとにおかしくなっちゃう……っ)
ハヒィ
「へへ、もう大分でき上ってきたなそろそろ仕上げと行きますかw」
ハヒ
グル
グル

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ…
くっ…手が冷える…こんな…
犬みたいな恰好……最悪よ……」

「みたいじゃなくて正真正銘の犬なんだよ。
極制服の衣装で犬のように這いずるなんて
四天王も堕ちたものだぜw」

「くぅぅ…は、恥ずかしい……
こ、こんな姿誰かに見られたら
その場であんたのことバラ裂き
にしてやるからね……！」

「まだそんな生意気な態度がとれるのかよ、
まあそれも今日限りだ、今日でお前を
本物の性奴隷にしてやるよ」

ひた

ひた

ズビュズビュズビュー！

「んひいいいいっ!?」

「似合う似合う、ぴったりだw
犬なら犬らしく尻尾をつけないと
いけねえからなw」

ズブゥ!!

ビくん

ビくん

「やっ…！こんなとこでバイブ
入れないでよぉぉ……んひぃ！
す、進めなくなっちゃうぅ……」

「おらおらどうした？
さっさと進まないと
誰かに見られちまうぜw」

ヴヴヴヴヴヴ！

「あうぅっ！す、進むっ！
進むからそれやめてぇぇ……！」

ヴヴヴヴヴヴヴヴ！

「ひぎぃっ！んあっ！あひっ！
ひぃん！ひぃぃぃぃぃぃぃんっ！」

「おいおいどうしたんだよw
今までならもう少しはまともに
動けたろ？」

ヴィー!!

ビクッ

ビクッ

「あっ！あひっ…！らめぇ…んあぁっ！
気持ち良すぎて歩けないぃ…！
ま、毎日犯されて…んはっ！
か、感度があがっちゃってるのぉ…
ひゃひぃぃんっ♡」

「へへ、そろそろ分かってきただろ？
お前もう四天王でもなんでもない、
ただの性欲狂いの雌豚なんだよ」

「ひゃひっ！んあっ！
あぁぁっ！も、もうらめぇ…！
んひいいいいんっ！」

「そろそろ限界のようだな、
イクときはちゃんとイクって言えよ」

「ひっ！ひゃひっ！はあぁぁんっ！
やぁぁ！イクっ！イッちゃうううう！」

ヴヴヴ!!

ビュシャアアアアアアアアア！

ビュル！ビュッ！

「えひいいいいいいいんっ！」

びくっ

びくっ

「はひぃ♡はひぃ♡
はふ…き、気持ちいぃ…♡」

「へへ、
なかなかの潮吹きっぷりだぜ」

（わ、私…なんでこいつに言われるがままに
イクって答えちゃってるのよ…
でもそう言うと身体の奥がキュンキュンして
もっと気持ちよくなるの……♡）

ビクッ
ビクッ

ウヴヴヴ…

「あっ…！
……ね、ねぇ…ちょっと……
ト、トイレに……」

「ん？どうしたプルプル震えて？
ああションベンか、それならすぐに
案内してやるぜ♡」

「はぁ、はぁ…な、何よこれ…何にも見えないじゃない…
は、早くトイレに連れてきなさいよぉ…」
はぁ
はぁ
「ね、ねえ…他に
誰かいるんじゃないでしょうね…？」
「いるわけないじゃんw
いたら俺のことぶっ殺すんだろ？
そんな怖いことするはずないってw」
「で、でも……」
「へへ、もう連れてきたぜ、
乃音ちゃん専用の放尿ステージだw」
（ふんっ、どうせそんな事だと
思ってたわよ…！で、でもなに……？
人の気配が一人多い気がする……）
ヌチュ
ヌチュ

びくん
びくん
「まあまあ、そんなこと気にするなよw」
「ひゃひっ!そ、そんなこといいから…っト、トイレにっ…ひゃひぃっ♡」
「んあぁぁぁぁぁぁあ……っ!」
ブニュウゥ……!
(すげぇ!ホントに乃音様がまO こに指入れられてよがってやがるっ!)
「乃音ちゃん小便したいんだろ?俺が手伝ってやるから早く済ませちまえよw」
ズボッ!

ハチュ！

「ひっ！ひぎっ！や、やだっ！見られたくないっ！お、お願い！許して！お願いだからトイレにいかせてえ…！」

（うぉぉ！の、乃音様のおもらしシーンが見られるのか！こ、これはマジでラッキーだぜ！）

ハチュ！

ジュブ！ジュブジュブ！ジュブッ！

「ひゃひっ！あっ！んあっ！んあぁっ！や、やらっ！そ、そこはぁ…っ！」

「ほらほら、早く出しちまえよ。早くしないと誰か来ちまうぞぉw」

ハチュ！

「ひっ！いやっ！もうムリっ！
出るっ！おしっこ出ちゃうううう！」
ジョシャアアアアアア！
「やあああああああああ！」
「やぁっ！と、止まらないい…！
ずっと我慢してたから全然止まらないのぉ！
いやぁぁ…見ないで…お願いだからみないでぇ…！」
빈
빈
빈
뜰뜰렉!!

「はひ…いひ…ひ…いやぁ…もういやぁ…おしっこ見られるなんて…こんなのいやよぉ…」

「ひひひ、すげぇよかったぜ乃音さー目隠しを外してあげよぉねぇ♡」

「うぁ…な、何よあんた……なんなのよ……」

「の、乃音様のおもらしマジでエロかったです、こんな素晴らしいものを見せてもらって光栄です……っ！」

「いやー、どうしてもこいつが見たいって言うからさぁ、ほら、どうしたの？俺たちまとめてぶっ殺すんだろ？早くしてくれよ、しないんなら……」

「おら！
乱交パーティーの始まりだ！」
「やだっ！やだやだやだ！
やめてっ！離してよぉ！」
（何でっ！身体がまともに動かないっ！
今すぐにでも逃げ出したいのにチ〇ポ
見せられると身体が痺れて動けなく
なっちゃうぅぅ！）
「お、おい、ホントに大丈夫なのか？
乃音様にこんなことして？」
「心は知らんがこいつの身体は
とっくにチ〇ポの虜になってるからな。
ハメちまえばたんなる雌豚だぜ、
さっさとやっちまよw」

「よ、よしっ！いくぞ！」
ズチュズチュズチュズチュ！
「んあぁぁぁぁぁっ！」
ビク
ビク
ビク
ズズッ！
（いやぁぁ！また犯されたぁ！この私がこんな男どもにいいように扱われるなんてぇ！）
「す、すげぇ締りだ！ほんとにこれが犯されまくった身体なのか!?」
「ああ、こんな名器滅多にお目にかかれないぜw」

ズチューズコッーズチューズチュぅー
パチュ！
「ひゃひんっ！はひっ！んひぃっ！
ひいっ！はひいいいんっ！」
パチュ！
ビく
ビく
パチュ！
パチュ！
（ひいん！はひいん！ら、らめぇ！
さっきからずっといじられっぱなし
だったから凄く感じちゃう！
頭の中がビリビリ痺れちゃうぅ！）
「へへ、凄い乱れようだ♡
僕のチ〇ポでこんなに感じて
くださるなんて感動だぜぇ♡」
「バーカ、
俺の躾がいいからだよw」

「あひっ！ひんっ！ひぎっ！んひいんっ！」

「も、もうだめだ！乃音様のロリま○こに精液注ぎ込ませていただきます！」

「や、やらぁ！お願いらから出さないでぇ！」

びくん、びくん、

「はぁ！はぁ！うぉぉ！発射あぁぁ！」

ドビュー!!

「ひいいいんっ！やらっ！イクっ！イクイクイクぅうううっ！」

ビュブッ！ビュブルルルルッ！

「♡ひゃひいいいいいいっ」

「は…はひ…ひ…あひ…ひっ…
んひっ…はひいいい……」

「ふー、乃音様のま○こすげぇ
気持ちよかった…精液こんなに
出しちまったこりゃ俺の子
孕んじまったかもなw」

ゼェゼェ

ひく

ひく

トロー

残念だったな。俺はもう百発以上
このま○こに中だししてるんだよ。
とっくに俺の子を孕んでるはずさw」

「なんだとぉ、
くそぉ羨ましいぜ」

(もうダメ…こいつのいう通り
きっともう私妊娠しちゃってる…
それに私の身体…もう完全にチ○ポに
服従しちゃってる…
ごめんなさい皐月様…もう私
戻れないよ……)

パン!! パン!!
「ひゃひいっ♡ひっ♡んあぁっ♡つ、強すぎぃ…っ♡あひぃんっ♡」
「へへ！エロいおっぱいしやがって！どうだ!?乱暴にされるの好きなんだろ!?」
「んあぁっ♡はひっひいいんっ♡すっ、好きれすっ♡おっぱい乱暴に揉まれるの好きぃ♡」
「はは、やっと自分が雌豚だって自覚が出来てきたようだなw」
「ひゃ、ひゃひぃ♡マゾですっ♡わ、私は…んひぃっ♡いっ…いじめられて感じる変態雌豚なんれすぅぅ……っ♡」
びくっ
びくっ
びくっ

ズニュズニュズニュ！

（んあぁぁぁ♡ご主人様のお〇んぽ
喉の奥まで一気に貫かれたぁ♡
はひぃぃん喉チンコが潰れちゃうよぉ♡）

ビクッ！

ビクビク

「ひっひゃ♡ひぃっ♡んひっ♡ひぃぃんっ♡」

「おら、
自分だけ楽しんでんじゃねえぞ。
こっちの掃除もしろよな」

「んあぁっ♡も、もうひわけございまひぇ…
んごおおおおおっ！」

ズボッ！

ズボッ！

ズブッーズニュッ！ジュッ！ジュブッ！

「おらっ！どうだ雌豚！死ねっ！死ねぇっ！」

「んごっ！ひゃぶっ！んぎっ！ごっ！はぶっ！んぶうううっ！」

「おいおい、あんまり激しくすると乃音ちゃん本当にくたばっちまうぜw」

「うっせぇ！そんな事しるか！おら！元四天王の底力を見せてみな！」

（んあっ！はひゃぁぁ！らめぇっお〇んこも喉ま〇こもどっちもおかしくなるくらい気持ちいいっ♡まるで全身が性感帯になったみたいっ♡ひゃひいいいいんっ♡）

ズボッ！

ズボッ！

「んぐっ！んぼっ！んぶうっ！
ふっ！ふぐうううううっ！」

「はぁ！はぁ！
も、もう限界だ……っ！」

「く、クソォ！
俺もイっちまいそうだぜぇ！」

ビルル！

ビビュ！

（んあぁぁぁぁっ♡
きてぇ♡ご主人様の濃厚精子
喉の奥までたっぷり飲ませてぇっ♡）

ビュルルッ！ビュブブブゥッ！

「おごおおおおおおおおっ♡」

びくん
びくん

ひくん
ひくん
「はひっ♡ひっ♡おひっ♡ひっ♡
はへーっ♡はへーっ♡はひーっ♡」
「へへ、気持ち良すぎて痙攣して
やがる。おい、意識あるかー？」
「は…はひっ♡らいりょうぶれふぅ♡
おち〇ぽとっても気持ちよかった
れふぅ♡んひいいっ♡」
「へへっ、最高だぜ乃音♡
それでこそ俺様が見込んだ
性奴隷だぜぇ♡」
「かひっ♡
はっ、はりがとうがらいまふぅ♡」
イヒィ
イヒィ
イヒィ

ハッ ハッ
「はひぃ♡はひぃ♡はへぇ…♡」
(あぁ…すごい…ご主人様のお〇んぽビンビンに硬くなってる…♡私のま〇こに挿入したくてビクビク震えてるんだ…♡)
ドキ
ドキ
「へへ、なんだその期待に満ちた目は？乳首もこんなに固くして、ハメてもらえるのがそんなに嬉しいか？」
ギュッ！
「はひぃんっ！はひっ♡そうれすっ♡ご主人様のち〇ぽ私の雌穴に入れてくらはいぃ♡」
「ちっ、うらやましいぜ。おい、次は俺に交代だからな！」

びくん

びくびく

「おらっ！くらぇっ！」

ズブズブズブズブウゥゥッ！

「んひいいいいいいっ！
おっ！おじりいいいいいっ!?」

「ぐぉぉぉ、締りやがるぅ♡
ホントにこいつの身体は最高だぜ。
その気になれば世界一マゾ娼婦に
なれるんじゃねえかっw」

「んぎいいいいっ♡
しゅ、しゅごしゅぎるぅぅぅ♡
この体勢で突くかれると…ひゃひいっ♡
うんち穴の奥の奥まで届いちゃうぅ♡」

ズニュー!!

ズボッ！ズチュー！ズブッ！ジュブブッ！

「ひゃひぃんっ！ひっ！えひぃぃっ！
しょ、しょんなに激しくしないれぇっ♡
あ、赤ちゃんビックリしちゃいますぅっ♡」

ズコ！

ズコ！

「何てめえの心配してんだよ！
お前はただ俺のち〇ぽを
気持ちよくさせることに集中
すればいいんだよ！おらおら！」

ズコズコズコズコッ！

ズコ！

ズコ！

「あひっ！ひゃっ！ひゃひぃぃんっ！
ひゅっ！ひゅいまへんれひたぁっ！
あっ！あやまりまひゅうぅぅっ！」

びくん

びくん

「ひっ！ひゃひっ！んひいっ！
ご、ごひゅじん様ぁっ！
わ、わたしもうっ……！」

「はひいっ♡わ、わらひはお尻の穴で
感じる変態れしゅう♡ど、どうか私の
変態尻穴ま○こにご主人様の大切な
精液たくさん注ぎ込んでくらしゃいぃ♡」

「なんだ？願いがあるなら
雌豚らしく答えな！」

「ぐうう！合格だぜぇ！
受け取れぇぇぇぇぇぇぇ！」

ビュブブブルルルッ！

「おひいいいいいいいいいっ♡」

ビュビュウ!!

ハヒィ

ハヒィ

「はっ♡はひっ♡おひぃ♡
えひぃ♡ひぃ♡はひぃぃぃ♡」

「おい、いつまでも呆けてんじゃねえ。
望み通り出してやったんだ、
礼はどうした!?」

「はひぃ、ごしゅじんしゃまのザーメン…
たくさんわけてくださって
ありがとうございまひたぁ…♡」

「よし、次は俺だ！
乃音、まだまだ行けるよな？
へばったりしてたら承知しねえぞ！」

「はひぃっ、ど、どうぞご主人しゃまが
満足するまでわたひの穴という穴を
犯してくらひゃいぃ……♡」

ドロォ

「ひゃひんっ♡ひんっ♡んあぁぁっ♡はぁぁんっ♡」
ヘア
ヘア
ヘア
高い金払って手に入れた情報なんだ、嘘でたまるかよっ！だ、だけどこれで本当に乃音ちゃんとセックスできるのか…？
「う、うぉぉっ！マジだ！マジで乃音ちゃんがいるぜっ！」
ジュプ！
「あひんっ♡ひゃんっ♡ふひぃっ♡」
ジュプ！
「はっ、初めての方ですか…っ？ひんっ♡…ろ、ろうぞ…歓迎いたしますねっ……んひぃぃっ♡」
ジュプ！

「ひんっ♡はっ♡あっ♡あひっ♡」

ハッ

ハッ

「んあっ♡ひゃいっ♡
よ、ようこそお客様っ…んんぅ♡こ、ここは
雌豚の分際で四天王を名乗っていた愚かな
性奴隷…の、乃音をお好きなように犯して
いただく会員制サービスれす…はひいんっ♡」

（ハァ、ハァ、す、すげぇ！
あの気丈だった乃音様があんな嬉しそうに
腰振って…うう、すぐにでも飛びつきたいぜっ！）

「へへっ、おい乃音、新規のお客さんが
つっ立ってるぜ。ここのルールを説明
してやれよ」

ズチュ

ズチュ

「詳しい説明は…んひいいんっ♡
あ…後で…セックスの後で…ひいんっ♡
お…おひらせ…ひっひうんっ♡んひいいんっ♡」

「おらっ、説明は終わりだ！
さっさとこっちに集中しろ！」

「ひゃふぅんっ♡ひ、ひゅ、いまひぇんうっ♡
んぅ♡ごひゅじんさまのち○ぽ大きくなってるぅ♡
も…ひぁぁ…イきそうなんれふぅねぇ……っ♡」

「おらっ！イくぞ！
豚のように泣きながら昇天しな！」

ビュブッ！
ビュブブッ！

「ひゃひぃ♡
ぶひぃ♡ぶひぃいいんっ♡」

ビュー！

「ぶひいいいいいいんっ♡」

「はぁん♡はひぃん♡あぁぁ♡精液子宮の中で泳いでるぅ♡んぅぅ♡」

ビュルル！

ビュル！

「ひゃひぃ♡私の口ま○こにご主人ひゃまのプリップリザーメンたくさんぶっかけてくらひゃいぃ♡」

「おら！なに浸ってんだよ！こっちももう出るぜ！」

ビュルルルッ！ビュブウウッ！

「はうううううう♡っん」

「んぁぁぁ♡好きぃ…♡セックス大好きぃ♡
逞しいおち〇ぽに屈服してズコズコ侵されるの
大しゅきなのぉ……♡」

「へへ、
変態乃音ちゃんには白化粧がお似合いだぜw
おい、お前らもそう思うだろ？」

「は、はいっ、すごくエロいですっ♡」

「はいっ！もちろん入りますっ！」

「はいっ♡それではこれから
よろしくお願いしますね、ご主人様♡」

「んふぅ♡ありがとうございまふぅ…♡
どうれふかぁ、お客様？今会員になれば
無料で一時間私のま〇こいじくり放題ですよ♡」